
東方大罪章

嫉妬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方大罪章

【Nコード】

N18030

【作者名】

嫉妬

【あらすじ】

七つの罪が世界から忘れ去られ、幻想郷にたどり着く・・・だがそれは、小さな世界にとっては大きな禍でしかなかった。

プロローグ

神野 京は夢を見ていた。

見る夢はいつも同じ。暗い水の中を漂う夢だ。

上から光は来るが、そこまで届かず、真下は闇だった。

(ん?)

いつもなら真下の闇に光は届かないが、今回は違った。

紅い二つの光が下から自分を覗くように、まるで下に巨大な生き物が居るかのよう。

だが、その紅い光もしだいに薄れていき、元の闇に戻った。

(いつも同じか・・・)

そんなことを思った時、何かに体を貫かれ意識が闇へと消えていった。

プロローグ（後書き）

小説は書いたこと無いので、誤字脱字があると思います。

まだ使い方がわからないですけど、頑張っていきたいと思っています
す

一章（前書き）

誤字脱字がありましたらお申し付けください。

誤字があったので直しました

一章

「起きろ！授業終わったぞ」

その声を目覚ましに、神野じんの 京目きよめを覚ます。
目の前に、森野もりの 伸しんがいた。

「よく先生の前で寝れるよなあ。お前」

どうやら授業が退屈で、つい居眠りをしていたらしい。
俺が、無事に寝ていたのが不服なのだろ。

「別に、寝たくて寝たわけではないさ」

「そっか。先生が後で職員室に来なさいってよ。どっちかっていうとお母さんか？」

「ちげえよ！おばさんだ！」

俺には両親がいない。正確にいえば少し前まで母親がいたが、病で死んでしまった。

医者が言うには、原因不明で手の打ちどころがないということだ。
葬式もできず、身寄りのない俺を引き取ってくれた。
それがこの寺小屋の先生、上白沢かみしろ 慧音けいねだ。

「さっさと行けよ！先生怒っていたぞ！」

「マジかよ……。」

普段はやさしいが、怒るといつも頭突きをしてくる怖い先生だ。頭突きをするせいで、大抵の子供は大人しくなる。痛いのは誰だっつていやだからな。

伸に別れを告げ教室を、後にする。

「失礼します」

職員室にきた俺は挨拶して中からの返事を待った。だが返事はかえってこなく静寂とした空間が扉の前に張り詰める。

「これはそうとう・・・やばいな・・・」

頭突きをされることを覚悟し扉を開けた。

「失礼します」

職員室には先生の姿はなかった。

「あれ？ どこいったんだろ？」

とりあえず職員室の中にある倉庫を確認することにした。明日使うかも知れない教材を取りに行っていると思ったら、扉の前に数枚の札が貼られていた。

「札だ？」

札のことは気になったが、扉を塞いでいるように見えないので無視し取っ手に手をかけ引くことにした。

「おかしいな？ 開かない」

いくら横に引いても扉はビクともせず、動く気配すらなかった。仕方がないので札を？がすことにした。すると扉の向こうからドンドンと扉を叩く音が響いた。

「お・い・だ・」

扉の向こうには誰かいるみたいだ。

「そこで何やってんだ？」

教材倉庫の中に入るのは先生しかいない。先生以外の人が入っているってことは・・・泥棒？

「大人しくしていたら、先生が開けてくれるよ」

多分一緒に、役所の人がかかるかな？

「う・ん・な・！」

落ち着かないってことは、泥棒決定だね。これで頭突きは回避されるかもしれない。

「『不滅「フェニックスの尾」』発動！」

急にさつきより声が良く聞こえたと思っただら、扉の真ん中を突っ切るように火柱があがった。

「ったく。こんな場所に閉じ込めやがって」

扉の真ん中から一人の白髪の少女が……って

「妹紅さん？」

一章（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

一章（前書き）

誤字脱字がありましたらお申し付けください。

一章

「なんだ、京か。慧音はいないのか？」

「いません。それより・・・」

「それより？」

「扉をどうにかしろ！！」

さつき妹紅が『スペルカード』で、燃やし壊し粉碎した扉が、音を立てて

燃え上っている。

「おっ！ 我ながら上手く手加減できたものだ」

ニシシシと妹紅が笑う。

そういう問題じゃねえ！ やばいこのことが、先生にばれたら・・・

「どうした？ そんな真つ蒼な顔して？」

「あんた無神経すぎるわあ！」

本当に状況が理解できてないなこの人。

「ほれ、桶に水を入れてきたぞ京。さっさと火を消せ」

「先生ありが・・・」

「どうした？ 火を消すんだろ？」

先生から桶を受け取り、火に水をかけた。
ジユウウつと音を立てて火が消えた。

周囲にはあまり被害がでず、扉は炭と灰になっていた。

「いつからいました？」

職員室に入ってくる姿を見た覚えはない。

「火柱が扉を貫いたあたりからかな」

なるほど。だから水が必要なのがわかったのか。

「ちょっと妹紅こっちにきてくれないか？」

「なんだよ慧音？」

それだけ言つと職員室から妹紅と慧音がでてい・・・

ゴン

「うぎやあああああつ！！」

き、悲鳴だけがこつちに戻ってきた。

「あれは痛いな・・・」

だって音がゴツンじゃなくゴンだよ。
子供が食らう頭突きの音じゃないよあれ。

ゴン

ゴン

ゴン

悲鳴が聞こえないな？・・・

「京、すまないが服をとってきてくれないか？」

扉の外から先生の声が聞こえた。

「服って誰のですか」

服が欲しい理由は、何となくわかる。

「私の服に決まってるだろ。他に誰のがある？」

浴びちゃったのか・・・。それなら確かに必要かもね・・・。

二章（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

三章（前書き）

誤字脱字がありましたらお申し付けください。

連絡があった次の日までには修正します。

三章

「先生その人は誰ですか？」

服を取りに行っている間に一人増えていた。

「お前のおばあちゃんだそうだ」

「!?!」

先生がおばあちゃんと言っている人は、見た目が二十そこらの女性で翠色のドレスと金色の髪が特徴のきれいな人だが、気絶している妹^も紅^{こう}をつついてる。

ピクピクしてなんか面白い。良かったことに先生の服についていなかった。

「俺に親戚はいないんじゃない？」

「聞いた話では、母親の死はしっていたらしい」

知っていたのに来ない理由ってなんだよ。

俺の考えが読めたのか、急に女性^{おばあちゃん}がこっちに顔を向けた。

「仕方ないだろ。ワシとて孫の顔など一度も見たことないのじゃから」

本当におばあちゃんなのかこの人？

「心配するな。娘の結婚式にもでてない」

「胸を張ってそれを言うな。ババア!!」

アハハハハつと女性ババアが声を出して笑う。

でもその笑い方は悲しい笑いでもあった。

「それでリヴァルさん。お孫さんをお引き取りに？」

「いや。先に閻魔に用がある」

閻魔に用があるってすごいババアだな。

「何さまだよ」

俺の独り言が聞こえたのかババアが

「お姫様かな？」

ギャグだよ・・・な？ 真顔で俺に言ってるんだけど・・・

「閻魔に用があるって！貴女死ぬ気ですか!？」

先生が今までにないくらい怖い顔で、ババアをにらみつけた。

「別に戦争しに行くとは言っていないのじゃが？」

うっんと腕を組んでババアが悩む

「貴女が死んだら京はどうなるんですか!」

「死ぬ気などもつばらないのじゃが」

「ならどうして!？」

バンと先生が机を叩く。

ババアが思い出したように

「この小さな幻想郷^{せかい}には、地獄に行くための川があると聞いたが？」

「貴女はなにをいつているんですか!？ 話をすり替えないでください!」

「孫のことか？ 孫はそつちが預かってくれ。覚醒してない以上一緒に入れないからのう」

「自分の孫を何だと思ってるんですか!」

ババアが話していることに俺は理解できなかった。

「先生!先生え!」

突然職員室の扉が開いた。

扉を開けたのは、里の老人だった。

「先生たいへんだ! 里が妖怪に!」

「わかりましたすぐ行きます。貴女はここで待っていなさい!」

そう言うと先生は老人と一緒に職員室を出た。

いつも一緒に戦っている妹紅を置いて・・・

「さて。私も行くところかねえ」

「あんだ先生の言ってたこと聞こえてなかったのかよ」

「私はあの小娘を追っただけだが？」

先生を小娘って、あんだどんだけ年食ってるんだよ。

「お前も行くぞ。ついてこい」

襟を掴まれ引きずられるように職員室をでた。

結局服の意味は？

三章（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

四章（前書き）

誤字脱字がありましたらお申し付けください

四章

「放せババア！」

「いやじゃ。放したらにげるじゃろ？」

ババアに引きずられて先生の後を追う事になった。
けつが痛い。

「おお！？ いたいた！」

どうやら先生を見つけたらしい。
後ろ向きに引きずられているので、前（後ろ）の様子は分からない。

「ちょうど交戦中みたいじゃな」

「ここまで来たんだからいい加減放せよ！」

「しかたないのお・・・」

ババアが襟から手を放す。

やっと動けるようになった。

「相手は、蠅ベルゼブブの王か・・・」

「ベルゼブブ？ 聞いたことない妖怪の名前だけど？」

「空をしてみる」

ババアが空を指さす
空には・・・

「でかあ!？」

全長5メートル以上の蠅がいた。

「あと火も吐くぞ」

「蠅なのに火吐くの!？」

「ハア、お前しらんのか？ あれでも魔王だぞ」

「知るかそんなの!」

蠅が火を吐くことすら驚きなのに・・・その上、魔王はないわ・・・

蠅は先生の周りを火を吹きながら回っている。

先生も『スペルカード』で応戦するが、蠅には全く当たらない。

「さて、助けにでも行こうかね」

それだけ言うとババアは先生のところへ飛んで行った。

四章（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1803o/>

東方大罪章

2010年10月25日21時11分発行